
cherry blossom

紅李 桃奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

cherry blossom

【Nコード】

N7286Q

【作者名】

紅李 桃奈

【あらすじ】

作者の普段の日常を綴った詩のようなもの。
卒業の日を過ぎたら完結です。

「あはははっ！超ウケる！！」

ってよく言ってるけどさ

きつと、この日々は「ウケる」なんかじゃ表せないよ

友達と馬鹿なことしたり、好きな人と話したり…

他愛も無い日々だけど

それが一番私が望んでいることで

それが一番私を私らしくさせてくれて

それが一番私の大好きなこと……

だから

永遠に、卒業しなければいいのって思うの

だって私は

卒業したらここを旅立たなきゃ駄目だから

皆とも…お別れ

もう後戻りは出来ない

そう

もう変えられないんだ、この事実

今日もいつものように学校に通う

私は朝早めに来るから

友達と喋ったり、馬鹿なことしたり、恋バナしたり……

よく、ネタが付きないよねって思うけど

毎日、毎日が楽しい

男子とも勿論絡む

好きな人を当て合いつこしたり

はたまた好きな人のことだからかわれたり

恥ずかしいようで、結構楽しんでる自分がある

でもね

私が一番絡みたいのはアイツ

私の後ろの席の……アイツ

授業中でも、絡みたいから態々わざわざ後ろを向く

先生に注意されても気にしない

だってアイツが笑ってくれるから

注意された私のことを

Mな訳じゃないよ？

アイツと絡みたいだけ

それをMっていうのかな？

まあどっちでもいいけどさ、アイツと絡めてんだから

……にしても、さっきから男子の視線キツいな……

完全冷やかしてるでしょ、私のこと

バレンタイン一週間前だから、変な噂はやめて欲しいんだけどね

今年は……気持ち、伝えるんだから

私の、アイツに対する恋心を

……なんて言えないよなあ

男子にバラしたら絶対に言いふらすもん

…とにかく、変な噂だけは流さないでよね？絶対に！！！！

……………結局、聞いてないんだよねえ…

はぁ…馬鹿なんだから

1（後書き）

いかがでしたか？？

今日の気持ちを書いてみました。日記感覚？w

楽しんで書いてこうと思います！！

2 (前書き)

短い!!とにかく、短い!!

今日もいつものように学校に通う

そしていつものように喋って

いつものように男子をからかい

いつものようにからかわれる

だけど今日は少し違った

今日は、私の友達が

両想いになったのだ

友達の想い人に

「あんたの好きな人誰!？」

と問い詰めた

すると、意外とあっさり言った、その名前は

あの子の名前

念の為、もう一度聞いてみた

そうしたら、やっぱり言ったのは

あの子の名前

何故か、私も嬉しがっていた

自分のことのように嬉しがっていた

飛び跳ねて、叫んで、祝福した

こんなにも、人のことで喜んだのってあつたっけ？

そう思った

“友達”だからだよ

きっと

ああ、なんて特別な存在なんだろう

“友達”って

私は、もう一人の友達と幸せの絶頂の君を羨望の眼差しで見つめていた

「ウチらも両想いになりたいなあ……」

と

3

バレンタインまでの日にちを指折り数える

1、2、3……

5。あと5日しか日にちが無い…

男子もバレンタインの話題はしているみたい

「今年は貰えねーだろーな」

とか

「お前は絶対 から貰えるだろ！」

とか。

勿論、私の名前もその話題に出ているだろう

だって私はアイツにチョコを渡すから

想いを絶対に伝えるから

フラれても…構わない

想いを伝えられたことだけでも

私の一生の武勇伝として残るはずだから

だから

両想いは望まないよ

そりゃ、両想いになつたら嬉しいだらうけどさ

今でも十分楽しいんだもん

友達関係のまま

同じクラスになつたことだけでも

それは限りなく奇跡に近いことだから

貴方に訊きたい

私は貴方に恋をした

それで私は綺麗になれたかな？

少しだけでも

…え？いや、違うよ

容姿が美しくなつたとかじゃなくて

心

貴方に恋をしたこと

それだけで

女って綺麗になれるんじゃないかな

自分じゃ分かんないけどさ

私は嬉しかったよ

毎日がきらきら輝いて

その思い出で心が彩られて

それで

心が綺麗になったかな？って訊いてるの

今日の放課後

担任から呼び出された

「話があるから、親友二人と来い」

だそうだ

何か疾^{やま}しいことだな

野生の勘が、そう言っていた

思い当たることが無い訳ではなかった

「絶対“あのこと”だよ」

「どうする…?」

「正直に言おう」

不安な気持ちを抱えたまま迎えた放課後

疾しいことは

やはり私達が予想していた“あのこと”だった

私は結構な問題児だ

だから説教慣れしている

説教をするのは

隣のクラスの学年主任

私の尊敬できる先生の一人

私達の味方になってくれる

しかし私達が悪事をする

敵になる

私達はこう読んでいた

“てきみかた
敵味方”

意味はそのまま

説教では最初の方は敵だ

しかし後に味方になってくれる

親身になって

卒業まであと少ししか無い

あと何回

“敵味方”の先生にお世話になるのだろう

出来れば少ない方が良くいんだろうけど

でも

毎回説教を受けて

毎回味方になってくれる度に

目が潤うるんでしまうのだ

4 (後書き)

今日本当にあったことツスW

姫とアリスと説教受けた……。

必死に作っている

クッキーに

想いを込める

そう

明日は対決の日

バレンタインデー

今年は例年に比べて

気合いの入れ方が半端ない

だって

貴方に想いを伝えるから

明日こそ伝えるから

好きなんだもん

貴方のこと

“好き” っていう気持ちを込めて

ラッピングする

そして、最後にマシュマロも入れる

知ってる？

クッキーには“好き”っていう意味があって

マシュマロには“大好き”っていう意味があるんだって

私、不器用だけど

お菓子作り頑張ったんだから

貴方の為に

この想い

絶対に

伝える

6 (前書き)

今日…つまりバレンタインのことです。

今日是对決の日

朝、いつもより早めに登校する

君に“私の^{クッキー}気持ち”を渡す為に

だけど教室には

からかう為に早めに登校した男子^{野次馬}達がいた

その中には君もいて

今の状況では渡せないと確信した

その後も君と喋る機会があったが

喋るだけで

“私の気持ち”は渡せなかった

しかし

時は来た

掃除時間の真っ最中

君は教室にいない

野次馬もいない

こっそりと

君の机の中に“私の気持ち”を忍ばせる

どうか届きますように、と祈って

君は机の中を見たら

驚いたような顔をしていたね

私は逃げた

このままじゃ心臓が保たない

そう思った

教室に戻ったら

君はいつも通りふざけていた

少しだけ安心した

私は

君のことを少し避けながら

友達と喋っていた

大急ぎで家に帰った

ピアノだつてろくに弾けない

それはきっと

君を想っているから

今頃君は

包みの中に入った手紙を

読んでいるのでしょうか

クッキーを

食べてくれているのでしょうか

知りたいけれど

分からない

手紙の内容

“義理じゃないから”

ちょっと素っ気なかったかな

少し反省

もうちょっと素直に書けば良かったかな

でもそれが私の気持ち

私は口下手だし

文章も上手く書けないから

それぐらいしか思いつかなかったよ

すごく遠回しな書き方

ストレートに

“好き” って伝えたい

…君は分かってくれたのかな

私の精一杯の

この気持ち^{きもち}を

6（後書き）

2 / 1 4 の活報も是非見てみてくださいね
今日のこと詳しく書いてありますから。

7 (前書き)

昨日の出来事です(汗
古い情報ですみませんm
|
|
m

バレンタインに

君に“私の気持ち”を渡してから

一日が過ぎた

はつきり言つと

「学校に行きたくない…」そう思った

だって

冷やかされるかもしれないじゃない

そんなのは絶対に避けたかった

私は

臆病だから

少し憂鬱な気分で歩いた通学路

前方に見えたのは

“君”の姿

思わず俯く

君に私はどう見えていたのでしょうか

きつと

すごいビビリ屋だっと思ったんだろうね

たまにはビビリ屋になったって良いじゃない

時に恋は人を変えるんだから

でも

本当に

昨日の出来事は

今までの私を変えた

「おーい、テープ借りる」

「超ウケる!!」

普段から君は

笑顔で私にそう言ってくれる

それに私は笑顔で応える

なのに

今日はそんないつものことが

すごく恥ずかしいことに思えてきて

だけど

私の気持ちを知っても

態度を変えない君に

また惚れ惚れしちゃったりして

前以上に

君のこと意識しちゃってる

…男は知らないんだよね

バレンタインに

女がどれだけの不安と期待を胸に抱いて

臨んでいるのかってこと

それだけ色んなことを背負って

この日の為に懸けてるの

だから

この気持ちは本物なの

7（後書き）

あとで八話も書くつもりです

今日もやっぱり

通学路を歩く足取りは重たかった

君に会いたいの

会いたくてたまらないのに

心の中には

未だ羞恥心が蟠りわだかまとなつて残っている

教室には

結構仲のいい女子

スクールバッグからささっと荷物を取り出して

教室の後ろの女子の輪に加わる

話の内容は

案の定バレンタインのこと

世間で言う

“恋バナ”というもの

ふと教室を見渡した

すぐそこにあっただのは

君の机

置きっぱなしにされたリュック

きつと

登校してすぐに

友達とサッカーの練習に行ったのだろう

「ちゃんと荷物取り出してからサッカーすれば良いのに……」

そう思いつつも

そんなところも愛おしく思えてくる

もう一度君の机に視線を戻す

するとそこには

思いがけない事実があった

君のリュックにぶらさがっている

ゲームのキャラのマスコット

それは……

私がバレンタインに

クッキーと共にあげたもの

絶対に捨てられるだろう

だめもとで渡したのに

嬉しさと恥ずかしさ

両方が混ざったような不思議な感覚

私は

その間に女子が話していた内容なんて

全く耳に入らなかった

8（後書き）

今日、実際にあったことです

学校に行くのが

慣れてきた

君とも普通に喋れるし

冷やかしてくるのは一部の奴だけだし

このまま

君との関係も

何のアクシデントも起きないまま

卒業を迎えるのだと思っていた

しかし

今日

衝撃的な出来事があった

“私の気持ち”を渡しても

特に反応は無いことに

私はこう思っていた

「君に女だっと思われてないから流されたの…？」と

はつきり言っ

私はどちらかと言うと

変なキャラだ

妄想はするし

ちよつとズレてるし

男っばいし

そう思ってたのに

今日君に言われた言葉

「チヨコ、ありがと」

一瞬、何を言われたのかが分からなくて

聞き返した

でも夢じゃなかった

「チヨコ、ありがと」

確かに、そう言ってくれていたのだ

嬉しいのに

嬉しいのに

だけどすごく恥ずかしくて

「ああ…うん」

って

言葉を濁らせちゃったよ

…好きなのに、ね

本当はすごく

嬉しかったのに

だけど

素直になれなくて

君の前だと調子狂っちゃうよ

他の男子には言えることも

君には言えない

馬鹿なことも

君の前では

謹んでいるし

寝ても覚めても

君が頭に浮かび上がる

会えると嬉しくて

話せると飛び上がりそうなほど嬉しくて

君のせいで

私は変わってしまう

君はすんごく

ずるい奴

ひと言ひと言が

私を惑わせる

でも

変わりたい、と思う自分がいて

惑わせて欲しい、と思う自分がある

君がそうしてくれるのなら

9（後書き）

是非、活報も読んでみて下さいねッ

10

月曜日、って

すぐもどかしい

休日が終わってしまった

学校なんて面倒臭い

…なんて以前のこと

学校に行くのは面倒臭い

だけど

君に会えるから

学校に行くのが苦にならない

でも

何故だろう？

最近

君の存在が

すごく遠くに感じる

君にとって

私はただのクラスメイトでしか無いでしょう？

私にとって

君は特別な存在なの

休み時間

友達と移動する

君は

男子の輪の中心にいた

「私もあの中に入りたい…」

って思ったけど

それは決して口に出さない

でも

何をしてるのかやっぱり気になって

ちらりと盗み見る

君は

オルガンを弾いていた

子供がするようなお遊びのようなものじゃない

ちゃんと…美しいメロディーになっている

弾く姿も

サマになってるね

いつものふざけた君も良いけれど

今の君は

すごく大人びたように見えるよ

鍵盤だけを見つめた瞳は

とても同じ年には見えなかった

ヤバイ

頬が熱い

私は慌てて教室を出た

私…かなり高揚してる

本当は…

もっと

もっと

いつもと違う君を

見ていたかったんだけどね

10（後書き）

文中に出てきた“友達”って、姫のことだからね？
おい、姫、見てる？？w

11（前書き）

遅くなりました!!

“君に逢いたい”

その気持ちだけが胸を渦巻く

もう

四日は君に逢っていない

今すぐにでも君に逢いたい

私にはもう時間が無いのに

神様って意地悪

どうして

こんな大事な時期に

風邪を引かせたの？

一日中

閉ざされた部屋の中で過ごす

最初は

楽で良いかな、って思った

だけど

私には

どうしても時間が足りないの

この殻を破って

君に逢いに行きたい

無邪気な笑顔を見せてよ

好き…

好き……

この気持ちは止めようがなくなっ

勝手に暴走してしまう

自分で感情さえもコントロールできない

それほど君のことが好きなんだよ

頭の中も胸の内も

全て君に支配されてる

私と君の距離が離れる日

そう

卒業式

その卒業式まで…

あと16日

そのうち

君に逢えるのは

12日だけ

休みなんかいらぬ

君と一秒でも長く一緒にいたい

もっと…君を感じていたい

特別喋ったりしなくても良い

遠くから君のその姿を見つめるだけで良い

その輝いている存在を

この目で確かめたい

それだけで良い

12日なんかじゃ足りない

もう少し

もう少しだけ

タイムリミットを延ばして

君が遠ざかってしまわぬように

でもそれは

叶わぬ夢

11（後書き）

あー…もう本当にタイムリミットが迫ってきてて、憂鬱です…（涙

1
2

今日は

学校に復帰

僅かな休日が終わったが

希望の光は差していた

君に逢える

そう信じて学校へ向かう

しかし期待はあっさり裏切られた

君は欠席

折角学校に来たのに……

その思いばかりが胸を占領して

周りからも

「お前、アイツが来なくて寂しーんだろ!？」

と言われる

寂しいに決まってるじゃん

当たり前……

だけど

その気持ちを押し殺して

普通に男子と絡む

そうしたら

ある男子が私に向かってぼつり

「この前のこと、本当だからね」

“この前のこと”……………

ああ、そうだ

この前、この男子に

「Tって、お前のこと好きらしいよ」

って言われたんだ

相手にしてなかったから、忘れてた

もし、そうだったら

どんなに嬉しいか

でも

そんなはずは無いから

そんなことを信じて

裏切られたら

普通に振られるより傷つくと思うから

だから信じてはいないけれど

「俺、アイツから相談受けたんだって」

何か色々と理屈を並べ立てている男子

……そういうことは

本人から聞きたいの

君の口で

君の言葉で

君の表現で

言って欲しい

第三者だと信用が低いから

もしも、からかうためだったら、とか
でもね

多量なりとも信じたいよ

良い結果を望む訳ではないけれど

悪い結果も望んでないから

少し…期待している自分がいたりする

13（前書き）

昨日（3／4）の執筆中小説です（＾－＾；）

昨日は、時間が無くって投稿出来なかったんですよ…。

今でもまだ信じられない

私が…

君と付き合えることになったただなんて……

時は

今日の六時間目の社会が始まる直前

君の友達が

小さな紙切れを私の机に置いた

「これ、アイツからだから」

そう、君からの手紙

何だろう…落書きかな？

そう思いつつも、小さく折り畳まれた紙を開く

そこには思いがけないことが書かれていた

『好きです。付き合ってください。返事下さい。』

君の筆跡だった

君がいる方を見てみると

目が合ってしまった

しかしすぐに逸らされてしまった

…おかしい……

明らかにいつもの君じゃない

そわそわしながら授業を終えた

君に話し掛けよう、と決心したけれど

君はわざとらしく友達と何処かへ行ってしまった

この抑えきれない何かを

私は親友に話すべきだと考えた

親友を呼び出して、状況を話す

さすがは親友

「返事したげなよ！」

と私を後押ししてくれた

… だけど

私は素直に喜べていなかった

これは騙し告白かもしれないのだ

もしそうだったら

馬鹿みたいだろう

なかなか決心がつかない

でも

そこを後押ししてくれるのが

親友の良い所

私の気持ちの整理もついた

可愛いメモ帳を用意する

そして

私が伝えたい想いを書き連ねていく

だが書くだけでは駄目

渡さなくてはならない

私は机に放置する予定だったのだが

親友に連行され

友達とふざけている君のもとへ

先程の手紙を君に握らせる

君は少しだけ嬉しそうな顔をしていた

私は耐えきれずに自分の席へ逃げた

スクールバッグに突っ伏する

そのまま終わり

皆が教室を出て行った

慌てて私も鞆を持つ

すると親友がひと言

「読み終わったあと、『嬉しい?』って訊いたら、はにかみ笑顔で
頷いてたよ」

そう言って、教室を出て行った

…騙し告白じゃ、無かったんだ

そう安堵した

そして私も教室を出た

今までの出来事は

全て今日の為だったんだ

両想い、って

こんな気持ちなんだ

自然と顔がにやけてしまう

胸を占領する君への想い

「好き」

君も今頃

こんな甘酸っぱい気持ちなのかな

そんな妄想も

今はこの気持ちを鮮やかに彩る

……ねえ

卒業まで

よろしくね

大好きだよ……？

13 (後書き)

やばい、嬉しすぎる……。

活報にも、このことが書いてあります。良ければ見てみて下さい
このことで短編も書く予定です！

君と両思いになってから

初めての顔合わせ

期待はあっさり

破られた

男友達が

私と君のことを冷やかす

でも直接冷やかすわけではない

私たちと少し距離を取って

冷やかしの言葉が聞こえるか聞こえないかのぎりぎりの声で

冷やかすのだ

「桃奈の夫は、T~!」

T、とは君のこと

桃奈は……私だ

言ってる奴らは

分からないだろう

軽くふざけて言っているその言葉が

私と君の距離を

どんどん遠ざけていつていることに

目が合っても

逸らされる

普段だったら

近くにいたら君から話掛けてくれるのに

話し掛けてくれなくて

でも意識し合っていて

そんな微妙な関係

ヤダよ…

こんなに生温いなまぬる関係になるんだったら

両思いにならなければ良かった

そんな勿体無いことまで

考えてしまう

両思いになれるなんて

私の永遠の夢だったのに

その夢が叶った途端

捨てたいと思うようになるなんて

決めたじゃない

今を思いっきり楽しむ、って

なのに

なのに…

どうして……？

私は

友達のカップルみたいに

第三者も交えてだけど、デートして

学校でも、恥じらうことなく堂々として

プリ撮ったりして

そういうこと、やってみたい

私たちも、いつか、そんなこと出来るのかな？

でも「いつか」っていつ？

私には時間が無いんだよ？

もう逢えなくなるかもしれないんだよ？

君にそう伝えたいのに

伝えられない

君が、三日前に手紙に書いてくれたじゃない

「好き」だって

私も、書いたの

「好き」だって

私が「好き」なんて言ったの

初めてだったよ？

最初は友達から言ってもらって

次のバレンタインは

告白はしたけれど

「義理じゃないから」で

「好き」なんてひと言も言っていない

だけど

初めて言っただよ

君に対して

初めて言った

「好き」だって

君への気持ちは冷めることは無い

私は君のこと「好き」じゃないよ

「大好き」だよ

君はどうなんだろう

私のこと

「好き」…なんでしょ？

そう信じて良いんだよね？

「好き」ならば

私に時間が足りないってこと

分かって欲しい

今日

君の友達に

私が引越しすると言つ事実をバラされてしまった

相手は…そう、勿論、君

美術の時間にそのことを知らされて

私は撃沈していた

だって

自分で言っただ、って決めてたのに

でも恥ずかしいから

結局は感謝した方が良かったのかな？

君は

美術の時間

窓際でサボっていた

いつもなら男子と集っているのに

その時は一人で

魂が抜けたみたいな感じだった

そんな調子のまま下校時刻を迎えた

私はいつも

少し遅めに学校から出ている

それに対して

君はいつも猛スピードで教室を出る

でも今日は違った

何か探し物をしていたみたいで

ほんの少しだけ

君は教室に残っていた

こんなこと

好きになってから初めての出来事

私は

最後まで君の姿を目に焼き付けていた

探し物が終わったらしく

教室を出て行こうとする君

教室の後方の扉から君は出ようとした

その時

私は見てしまったんだ

目をごしごしと擦る君の姿を

私は視力が悪いから

見間違いかもしれない

でも

私には

君が泣いていたように見えた

私は

君のことが心配になって

気になって

廊下を歩く君を

目で追っていた

丁度君が

教室の前方の扉の所を通った時

君が私の方を振り向いた

私はずっと君のことを見ていたから

勿論目が合った

その時

君はどんな表情カオをしていたと思う？

私の見たことの無い表情だった

切なげで

凄く哀しそうで

もう今にも泣いちゃいそう

いつも輝きが宿っている瞳は

弱々しくて

いつもの君じゃないみたい

私の思い込みかもしれない

気にし過ぎかもしれない

でも

もし君が

私の引越しのことを聞いて

そんな表情をしているのなら

それは

私のことが好きだって

受け止めても良いの？

… 自意識過剰？

… そこまでの意識を持ってないと

自分を失いそうになるの

私のせいで

君がそんな力才してるんだって

自分を責めなくなる

私が君と繋がってられるのは

君のリュックについているマスコットと

私のポケットにいつも入っているマスコット

それがお揃いだってことだけ

だけど

ポケットにあるマスコットを握るだけで

君と繋がってられるような

そんな気がする

私と君は

まだ直接関われないまま

君は

私のコト

好きでいてくれてる、って

私は信じたい

君は

私には何も言わないけど

私の友達には

本音をぶつけてるんだね

恥ずかしいんだろうけどさ

私は

君ともっと近付きたいよ

君ともっと喋りたいよ

君ともっとふざけたいよ

……なんて言っても

私の方から

君を避けてるのも

事実と言えば事実

私だって

君の友達には

君のことを相談したり

君の情報を色々教えてもらったりしてる

お互い様か…

私ってわがままでよね

君には

「本音を言っただけいい」

って思ってるのに

実際には私が

君が近付いてきても

逆に離れていつてる

馬鹿

アホ

馬鹿

アホ

自分が馬鹿でアホで

そんな人間に思える

折角夢が叶ったって言うのにさ

でも君もそう思ってるのかな

お互い様だよ

変な遠慮しちゃってるんだよね

時間が無いのは

誰よりも

君と私が一番知ってることなのに

つまり

君も馬鹿でアホってこと？

…いや、君のことは悪く言いたくない

私が馬鹿でアホなんだよ

うん、きつとそう

馬鹿でアホで

ついでにわがままだな

こんな私に

嫌気がさす

だから私は

物にあたる

壁を蹴り飛ばしちゃったり

机を思いつきり拳で叩いたり

でもそれで

私の心が晴れることはない

…ねえ

私の親友がね

「桃奈が引越す前に、俺、何か出来ることあるかな」

それを君が言ってたって教えてくれた

何かしてくれるの？

なら

君と普通に喋れるようにしてください

馬鹿でアホでわがままな、私の心が晴れるには

そうしてもらいたいんです

馬鹿でアホでわがままな、私が君に対して言った

最初で最後のお願いです

17（前書き）

昨日の執筆中小説です…！
すみせんm（――）m 停電停電、って騒がれてたので、慌て
てPCやめちゃったんです…。

今日はホワイトデー

私はほんの少しの期待と

沢山の不安を抱えて

登校した

教室には

君と、君の友達と

私

…おいおい、女子、私一人だけかよ……

喋る相手もない

無言のまま教科書を机の中に入れる

その時

教科書が

何かにつつかえる感じがした

そして聞こえる

“ガサツ”という音

私は、机の中を覗いてみた

そこにあっしたのは

青い袋

まさか

君からの……お返し？

私は

今すぐにでもその袋を開けて

中身確かめたかった

だけど

教室は男子だらけ

しかも妙に視線を感じる

あー、反応を見て楽しんでる感じですか

君は

わざとらしく塾の宿題やってるけどね

私はその青い袋に

気づかぬフリをした

そして

親友の一人も、美術の時間にお返しを貰った

「中身、見ようよ」

そう言つて、渡り廊下に直行

初めて中身を見る

そこには

焼き菓子らしきものと

細長い…箱？

その箱はしっかりと包装されていて

学校で開けることは危険だと思った

私は家で開けることにした

停電があるから、と午前授業になり

わりと早めに家に着いた

自分の部屋に直行

そして扉を閉め切った

そおつと包装を開けてみる

中身は

ピンクのイヤホンだった

嬉しくて嬉しくて堪らなくて

叫びたい気分だった

だけど親がいる

やっとの所でその衝動を抑えた

イヤホンを取り出してみる

私の大好きなピンク色のイヤホン

…ってか、何でイヤホン？

そう考えた時、思い当たる節があった

そういえば、以前

「誕生日にiPod nano買ってもらったんだけどさー、イヤホンは付属の奴のままなんだよねー。欲しいんだけどね…」

とか

「ウチ、色だったら断然ピンクが好き！」

と言ったような記憶が微かにある

…覚えててくれたんだ

私がそう言ったことも

私がピンクが好きだってことも

覚えててくれたんだ

そう思うと

君が凄く凄く

愛しく思えた

前よりも

もっともっと

君のことを好きになった

「大好き」だよ

離れることになってしまっても

明日は卒業式

早いな、って本当に実感する

大切な親友と

ちょっと照れるけど

大切な彼氏とも

お別れなんだ……

そう思うだけで

涙が出そう

でも

やるべきことは全てやった

そう思ってる

親友といっぱい遊んで、喋って

そして君に告白して

それで両思いになって

デートの約束もすることが出来た

何一つ悔いは無い

だけど

やっぱり

引越してしまう自分を

今まで…いや、今も

ずっと責めている

良い親友と出会えた

好きな人も出来て

最高の思い出も出来た

これで……良いんだよね

私の中から最高の思い出は消えることは無いんだから

だから私は

泣かない

涙なんか流さない

だって

泣いちゃったら

本当に

もう二度と会えなくなる

サヨナラになるみたいだもん

私はまた

親友に、君に

会いに行きたいんだもん

だから泣かないよ

ここで泣いたら

女が^{すた}廃る

私は泣かない

絶対に泣かない

たとえ

蜃気楼のような夢い思い出でも

私の中で消えることは

まず有り得ないでしょう

私は確信した

思い出は私の中に一生涯残るから

泣く必要など無い、と

今日は

一年を締めくくる“卒業式”だった

朝学校に来たら

皆がフォーマルな感じになっていて

お互いに「可愛い〜？」と褒め合ったりした

やけにテンション高いよね、私

きっと

今自分に直面している“卒業”という現実から

忘れようとしてるんだ

そして卒業式が始まった

歌や、呼びかけ……

練習通り……いや、練習以上に上手く出来た気がする

涙は出なかった

「サミシイ」っていう気持ち

押し殺す方に必死だった

皆

一年前より大人になっている気がした

君も

親友も

友達も

クラスメイトも

皆、皆、皆

大人になっていた気がした

式が終わったら

思い出を残すことに全神経を集中させた

卒業アルバムに寄せ書きをしたりね

キヤーキヤー言いながらやったっけ

君のアルバムにもメッセージ書いた

君の方から、「アルバムに書いて」って言うてくれたから
凄く嬉しかったっけ

「ダイスキ」っていう素直な気持ちは書かなかったけど

「君と同じクラスになれて楽しかった」っていうことは書けた

写真も撮った

男女八人くらいで集まって

そして撮った

君は私の隣にいた

君の横顔はどこか寂しげで

私もふと切なくなった

デートの詳細も決めた

何でか分かんないけど

普段の時より

気兼ねなく、恥ずかしがらずに話せた気がする

デートの話とか

いつもなら手紙じゃなきゃ絶対無理だったけど

普通に皆の前で言っちゃったし

君も普段より恥ずかしがってない感じだった

親友と遊びにも行った

地元のイオンで集まって

プリ撮ったり

アイス食べたり

ショッピング見たり

停電で閉まってるかとヒヤヒヤしたけど

日頃の行いは悪いのに、運は良いみたいだ

昨日は閉まっていたのに、今日はちゃんと営業していた

親友二人の他に

偶然来ていた友達二人とも一緒に遊んで

決して特別なことでは無いのだけれど

凄く思い出になった

今年の春は

桜を見ることは出来なかった

でも良いよ

私の心は

私の思い出は

私のこの一瞬は

桜色に染まってる

“cherry blossom”終了において

この作品に書いたこと

それは全て私の実話

私の今までの人生の中では

ここに書いたことはほんの一部にしか過ぎないのだけれど

私には凄く大きなものに感じる

色々なことがあった

引越しが決まって

親友が両思いになって

先生に叱られて

恋バナもして

バレンタインに告白して

両思いになって

そして

卒業して

凄く

一つ一つが濃く感じた

何一つ悔いは無い

「ありがとう」

その気持ちでいっぱい

親友に

「ありがとう」

君に

「ありがとう」

友達に

「ありがとう」

これを読んでくれた方にも

「ありがとう」

そして、今まで私を支えてくれた全ての人々に……

「ありがとう」

20（後書き）

はい、遂に完結です！

早いな（・・・）

つていうか、これ書いてて、凄く楽しかったです

「あ、今日こんなことあった？ 書こ？」みたいなWWW

それでは、また

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7286q/>

cherry blossom

2011年3月23日13時23分発行